

サンプル問題

主催 日本情報処理検定協会

第XX回（令和X年X月）

文章入力スピード認定試験（日本語）問題

試験時間	10分
------	-----

第XX回（令和X年X月）文章入力スピード認定試験（日本語）問題

だしの味が料理のおいしさを決めるといわれることがよくあります。質の良いコンブや 40
かつお節をぜいたくに使って仕上げられた吸い物などを口にすると、その香りと風味が体 80
の隅々にまで染み渡ります。そして、心まで和ませてくれるように感じるのは、わたしだ 120
けではないはずです。 131

日本に根付いている文化の多くは、中国をはじめとする大陸から伝来したとされていま 171
す。それは食についても例外ではないでしょう。ところが、かつお節などからだしを取っ 211
て料理のベースとするのは、われわれ日本人が考え出した独自の方法だといいます。これ 251
は乾物なので、加工に手間が掛かりますが、干すことでうま味が凝縮され、短時間でおい 291
しいだしが取れます。もちろん、中国にも同じような料理のベースがあります。大きな鍋 331
に鶏や豚肉を入れて長い時間煮出し、野菜や香草を加えた味の濃いスープがそうです。淡 371
泊な味に仕上げるには、乾燥させた貝柱や干しエビを水で戻した汁を使います。さらに、 411
中国が発祥とされる精進料理には、植物性のだしを用いると聞きました。 445

欧米では、牛や鶏の肉や骨などに香味野菜を加えて煮込んだ、ブイヨンと呼ばれるもの 485
がさまざまな料理に使われます。ちなみに、よく耳にするコンソメとはこれをさらに丁寧 525
に煮出して、うま味を最大限に引き出したスープのことを指すようです。そのまま飲むこ 565
とができるのも、ブイヨンとは異なる点です。また、メニューに応じて魚などからだしを 605
取る場合もあるようです。 618

さて、国や料理によって素材も作り方も違うだしですが、不思議なことに、あるうま味 658
の成分は共通しているそうです。その一つはグルタミン酸で、コンブの味を研究していた 698
ある日本人が、1908年に発見したとされています。続いて、その弟子がかつお節の中 738
からイノシン酸を見つけました。これらのうま味物質は、さまざまな食品に含まれていま 778
す。やがて、この二つが一緒になることで相乗効果が生まれ、さらにおいしさが増すとい 818
うことも分かってきました。日本生まれの dashi と、中国や欧米などで使われているスープ 858
は、偶然にも同じうま味成分を組み合わせたものだったのです。 888

これらが作り出された時代は、現在のように世界中の情報をすぐに入手できたわけでは 928
ありません。それぞれの国で、経験則的にその味をおいしいと認識していたのですから驚 968
きです。おそらく、彼らが得たのは理論ではなく、時間をかけて工夫や改良を重ねながら 1,008
たどり着いた組み合わせだったのでしょう。どの国も、食に対する並々ならぬこだわりが 1,048
あったからこそ、作り上げることができたのです。 1,072

随分前のことになりますが、ある時、親しい仲間と一緒に山歩きに出掛け、渓谷に渡さ 1,112
れたつり橋が怖くてなかなか前へ進めなかった経験があります。それは、細く切ったタケ 1,152
や植物のつるなどを使って造られており、素材がかなり古びていたうえに、足を一步踏み 1,192
出すたびに揺れるので、落下の恐怖にとらわれてしまったのです。人里を離れた場所だっ 1,232
たので、他には交通手段が無く、幸いそれほど深い渓谷ではなかったこともあり、仲間に 1,272
応援されながら何とか渡り切ることができました。その後、友人が、昔は追い詰められた 1,312
武士などが簡単に切断して逃げられるように、植物だけで造られていたが、今は補強して 1,352

あるから大丈夫だと言うので、気が抜けたのを思い出します。	1, 381
さて、わたしが渡るのをためらったつり橋も、見た目はかなり古めかしい印象ではありましたが、よく見てみるとしっかりとワイヤで補強されていました。今でこそ、落ちないように整備されていますが、昔は丸太や板を渡しただけのごく簡素な造りだったのでしょう。起源は定かではありませんが、水のある場所をまたいだ倒木や転がってきた石などによって、ぬれずに対岸まで渡ることができることを発見した人類が、それをまねて造ったのが始まりだと考えられています。	1, 421 1, 461 1, 501 1, 541 1, 581 1, 598
記録に残っている限りで、わが国で最も古いとされているのは「日本書紀」に登場する木造橋です。諸説ありますが、現在の大阪市生野区周辺に存在していたのではないかと推定されています。当時は、中国へ派遣された僧たちが、さまざまな技術や学問を身に付けて帰国し、日本の土木工事を指揮したとされており、布教活動や庶民救済の一環として積極的に取り組んでいたといえます。世界的に見ればその歴史はさらに古く、紀元前4千年ごろのメソポタミア文明によって、れんがや石を使った橋が造られていたそうです。丸太や板に比べて、素材の強度は格段に良くなったものの、その分重量も増すため、両端を固定するだけの単純な構造では支えきれずに中央がたわんでしまいます。特に長さが必要な幅の広い川では、それまでの造り方では限界がありました。そこで考案されたのが、一定の間隔に脚を設置して荷重を分散させる方法です。こうすれば、頑丈な素材を支えられるうえに、たわみやねじれも防ぐことができたのです。	1, 638 1, 678 1, 718 1, 758 1, 798 1, 838 1, 878 1, 918 1, 958 1, 998 2, 023
また、上に向かってカーブを描くアーチ形も非常に強度があり、負荷を分散させるのに適しています。古代ローマ時代には、脚の部分を半円形にした石の橋が数多く架けられ、現在も一部は遺跡として残されています。他にも、人が往来する部分だけをアーチ形にした構造のものもあります。歌川広重が描いた日本橋は、弓なりにカーブしているように見えますが、画家による誇張かもしれませんし、何より現存していないため、実在していたかどうかは定かではありません。しかし、その下を船が通っていたと考えれば、なだらかな曲線を描いた橋だった可能性もあります。	2, 063 2, 103 2, 143 2, 183 2, 223 2, 263 2, 284
さらに、見ていて楽しいのは可動式の橋でしょう。堀に囲まれた古城などに取り付けられた跳ね橋が始まりだといわれています。安全を確保するため、味方だと判断した者だけが通れる仕掛けとして採用されたのでしょうか。わたしは、湾の中に設置された、一定の高さを超える大型船舶が通過するときに開閉する橋を見たことがあります。その方式は、古城の入り口とほぼ同じで、中央で接する2本の往来部分が両側に跳ね上がる構造でした。環境や状況によって、可動の方式はさまざまで、船舶通過時に折り畳んで収納できるタイプや中央軸が回転することで縦向きに変わる構造のものもあるようです。また、水に沈んだりケーブルでつり上げたりと、独特な様式もあると聞きました。人々が試行錯誤を重ねた結果、現在のあらゆる形の橋へとつながっているのです。	2, 324 2, 364 2, 404 2, 444 2, 484 2, 524 2, 564 2, 604 2, 631